

超越的威力

五月末の土曜日、東京唯物論研究会の合評会に招かれた。亀山純生・東京農工大教授の近著『現代日本の「宗教」を問いなおす——唯物論の新しい視座から』（青木書店）を論評せよ、ということだった。オウム真理教事件以降の宗教現象を分析しつつ、これまでの唯物論者の宗教観を再検討する力作である。

東京・市谷の一室には、哲学や倫理学を専攻する学者ら三十人ほどが集まっていた。議論になったのは、宗教とは何か、という問題だった。宗教の定義はなかなか難しく、宗教学者の数だけある、ともいわれる。今回の本ではこう説かれていた。《宗教とは、超

菅原伸郎

善	南
財	無

自然的超人間的威力（超越的威力）に対する諸個人の信仰を中核とする観念や感情・儀礼や象徴行為による独特の社会的行為であり、これらのまとまつた言説や教義、施設や場所、信者、同じ信仰をもつ行為集団によって担われる独特の文化的システムである》

出席者の多くは、宗教についてユダヤ教やイスラームのような絶対神を前提に理解しているようだった。この定義を受けて、中には「超越的威力を前提にした宗教は真のヒューマニズムと

はいいがたく、必然的に人間抑圧の側に立ってしまった」という発言もあった。こうした流れに、私は疑問を呈してみた。「超越的威力」を拝む宗教はたしかに多いけれど、キリスト教徒ならばこう反論するはずだ。超越神があるからこそ、地上の権力を相対化できる。それこそが権力者の横暴をただす根拠になる。「神の前での平等」ともいうのではないか。そういう意味では、たしかに宗教はヒューマニズムを超えているのだ。また、仏教はそもそも「超越的威力」を持つ宗教といえるだろうか。臨濟禪師は「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺せ」と教えていたし、「施無畏」という別名を持つ観音菩薩は何者をも畏れないことのシンボルである。浄土真宗の念仏も建前としては折りではないはずだ――

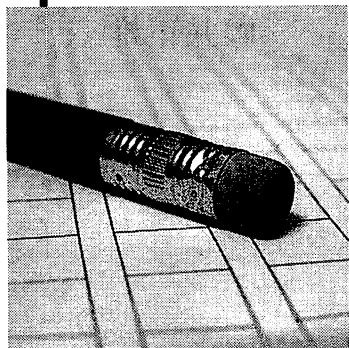
といった趣旨だった。

私の話がどこまで理解されたか、あまり反応がなかったのではよくは分からない。どうしようもない観念論者め、と呆れられたかもしれない。しかし、唯物論研究協会の事務局長を務めたこともある亀山教授は、一方で浄土真宗本願寺派の僧侶でもある。理屈通りでないことはよくよく承知していて、待ち構えていたように「でも、実態として、仏教徒の多くは超越的存在として仏を拝んでいるではありませんか」と笑顔で反論された。

今月号から本欄を受け持つことになった私は、二〇〇三年春まで朝日新聞東京本社で「こころ」のページを担当していた。寺院の育ちでもなければ仏教学を専攻したこともない、浅学非才の身である。取材でお目にかかった

諸先生に難問奇問を発して勉強してきたのだが、少々しつこすぎたか、今年初めに亡くなった坂東性純・元大谷大学教授には「現代の善財童子というわけですね」とからかわれたこともある。そういうわけで、この日も唯物論の真髄を教えていただきたく、いわば挑発してみたのだった。

ともあれ、仏教はそもそも「超越的威力」を前提にしているのか、いないのか、という問いである。たしかに浅草の観音様に手を合わせて願いごとを



する善男善女は絶えないし、「おねだり念仏」という言葉もある。阿弥陀仏や大日如来を超越神と同じように説いている僧侶も多いだろう。実態としては亀山さんの言われる通りかもしれないが、かといって、本来の姿を求めないわけにもいかない。懇親会の席で「どっちが本当なのか」と詰め寄ってこられた某先生には、とりあえず「スターリンという歴史的現実があるからといって、本当の社会主義はあんなものじゃない、と唯物論者もよく言うのでありませんか」と応じてみたが、さて、読者のみなさんは宗教をどう定義するだろうか。

(すがわら・のおお/ジャーナリスト。1941年岩手県生まれ。65年、朝日新聞社に入社。学芸部長、「こころ」編集長などを歴任。現在は東京経済大学などで講師を務める。著書に「宗教をどう教えるか」ほか)